

鼎談「after our Fukushima」

ゲオルグ・シュテンガー（ウィーン大学）

河本英夫（東洋大学）

ファビアン・ガーベルベルガー（東北大学）

通訳（ドイツ語）：山口一郎（東洋大学）

河本 今日シュテンガー先生を入れて鼎談ということで、いろいろな話をしたいと思います。シュテンガー先生は何度も日本に来ておられますが、今日はフリートークを多くして話していただければと考えています。2015年、今年3月にシュテンガー先生、山口先生、それから数名を入れ、「福島」を訪問し、回ってきました。

シュテンガー先生も福島に行かれるに当たり、当然、そういう話題が出るわけですから、シュテンガー先生の奥さまがえらく心配して、「鉛のパンツをはいていかないとまずいのではないだろうか」（笑）。そこまで心配しなくてもいいと思うのですが、おのずと警戒してしまう部分があり、そこをリラックスしていただくために、その後、福島のスパリゾートハワイアンズで温泉に浸かり、全身リラックスして緊張を解いていただきました。

第一に、福島を訪問されたときの感想と、そこから引き出される技術と自然の問題について、お話を伺えればと思います。

シュテンガー（通訳：山口） おっしゃるように、一般的な福島の放射線の問題を含め、私には大丈夫なのかという不安がかなりありました。とりわけ、いま閉鎖されている地域にまでかなり近づき、そこを通るということでしたので、一般的な放射線の問題について、「本当に大丈夫なのか」という不安がありました。しかし、私の同僚たち、皆さんが「大丈夫だ」と言うことなので、それを信用して旅行に参加させていただきました。

福島の事件は大きく見て三つの要素から成ると思います。一つは、自然災害としての地震と津波です。そして、もちろん人為的な事故、あるいは災害としての原発問題。この大きな三つの側面から見られるべきだと思います。

まず、初めに強調したいことは、そこに住んでいる人々、そして避難した人も含め、その人々の未来の問題、これからどうするのかという問題があります。否定的な側面が大きく浮き上がってくるわけですが、肯定的な側面としていちばん初めに訪ねた元東京電力の職員だった方（半谷栄寿さん）が、プロジェクトとしてトマトを現地の南相馬で栽培する。しかも太陽光発電のエネルギーを利用して。その地域で、恐らくまだ汚染量が一定で、安全性が確保されているといっても、どのような影響があるかまだわからないようなところですが、しかも、ハウス栽培でもってトマトをつくり、自分たちで販売もして経済的にも独立してやっていける。そのよう

なプロジェクトを立ち上げる人間のエネルギーがあることに感服しました。

第二の論点は最後に訪ねた、避難をされている方々の住居を訪ねた経験でした。これは非常に複雑な側面を持っていたと思います。まず、その場所にわりと年を取った方々が三々五々集まり、ダンスをしたり、読書をしたり、いろいろな形で人が集まり、お互いに気持ちの上でも支え合って生きていこうとしている。明るい側面と言えるかもしれません。当然ですが、一面的に明るいわけではなく、またつらい災害の過去ではなく、今の災害の否定的な側面も担いつつ、深い悲しみを担いつつ、集まってくる年取った人々という側面。

もう一つは、直接見たわけではないのですが、同行していた人々から聞いた若い人たちのやり場のなさ、未来のなさでした。まず、パチンコに興じていて、一定以上の仕事をしてはいけない。そして、現地に戻ることも当然できません。そして、現地に戻る一つの大きな動機であるはずの、先祖代々のお墓にも訪ねることができません。お墓に訪ねることができないということは、今まで生息してきた故郷、ふるさと、先祖とのつながりが断ち切られるということです。この点について、東京に住んでいる人々も、若い人々、年いった人々を含め、全体の故郷をズバズバにされ、故郷に戻ってこれられない人々の悲しみを、どれほど自分の問題としているかは非常に問題だと思います。恐らく、何も知らずに生きているのでしょから。

第三の論点は、哲学がどのようにこのような問題に対すべきかという問題です。哲学がどう問題にするかという問題の手前にあるのが、技術、政治や経済の問題だと思います。福島の事故、災害以来、ドイツでの反応はある種、明確な立場設定をして、メルケルさんの対応の仕方に見られるように技術、原子力発電を2030年までに全部放棄するというのですが、それは一つの政治的な決断なわけです。

ドイツには、技術の問題を技術で解決するという方向性もちろんあります。ということは、技術の問題を経済の問題として、あるいは政治と一つの問題として、どのようにして技術で技術を克服していくか、改良していくかという方向性があります。とりわけ持続性の問題、サステナビリティの一環にあると思えるのは、技術革新の結果がどのような影響を及ぼすかについての、技術の発展の結果を、科学的に計測し、科学的に予想するという長い伝統があります。そのような期間の下で、結局、技術的発展がどのような弊害を及ぼす可能性があり、その可能性をどのように克服していくか、克服していくことができるか。お金もかけて、技術でもって技術をこなしていくといった方向性が、まずあることを確認しておかなければなりません。

その一方、哲学がこういった問題にどう対応するか。その一環として、それに関連して日本の哲学の対応の仕方とドイツの対応の仕方に少し違いがあるように思いました。

一つは、ケアの問題について。その主だった視点は介護などに当たり、いわば人が人としてどのようにして生きていくか。表現するのはなかなか難しいのですが、人が人であること、どのようにしてその人間が健康に健やかに過ごしていくかという、人間性の側面が強調されてい

るように思いました。介護を受ける人と介護をする人との、相互の人となりというか、人間性の問題が強調されているように思いました。

先ほど申し上げましたように、人間性を強調することに対応する形、それに対置するのは、言ってみれば技術を技術で克服するという方向性だと思います。ドイツにもケアの学問がありますが、健康保持するような介護学という方向性で、とても強く技術の方面が強調されています。これが私の一般的な福島に対する大きな三つの論点、感想です。

河本 ありがとうございます。日本の哲学者は基本的に今回の事故に際して、いったい何を語ったらよいのか、何が語れるのかというところで、正確に言えば哲学はいったい何に寄与し得るのか。そういう問いに苦しめられてきました。つまり、自分自身の意義を、こういう場面でもどのようにして確認し得るかの作業をやらなければいけない場面があり、そこを通過させなければいけないということがありました。

シュテンガー これは本当に決定的な問題だと思います。哲学でない他の学問、例えば原子の技術に関する問題、経済の問題やエネルギー政策の問題に関して言えば、今あるベースの上にそういう災害が起こったときに、どのようにすれぼうまくいくかとか、経済的により効率がよいかとか。簡単な手仕事、当たり障りのない、こうしたらいいだろう、ああしたらいいだろうという小手先の試みでしかありません。そして、ここでのベースになっている問題、例えばエネルギー問題、技術の問題とどう関わっていくべきかという、人間が根底から問われる問題については、個々の専門科学では対応のしようがないものだと思います。

簡単な例を申し上げますと、日本において生活していく場合にごみの排出量は、単純な日本での生活経験から、恐らくドイツの5倍以上の日常生活のごみの排出量があると思います。これを原子力廃棄物の問題と一緒にするわけではありませんが、そもそも廃棄物をどのように対応していくべきかということは、非常に深刻な問題であり、これを果たして生きるふだんの生活の場面に落とし込んででも、どのようにしていくべきかということを根底から考える必要があるのではないかと思います。

土曜日の講演で私が強調したように、考えの変換は、ただ違ったふうに考えてみるだけのことではなく、私はフッサールとフーコーとニーチェを例として出しました。伝統的な哲学の歴史の中で、いったい何が起こってきたのか。主観性の相対化に力を入れ、フッサールは研究してきています。フーコーの場合は、理性と暴力という枠組みの中から、新たな権力構造を明確にするような仕事をしてきました。ニーチェの場合には文化を全体的に取り上げ、簡単に言うとは批判的、歴史的考察と言われるものです。文化を含め、総体的、全体的に西洋の歴史を批判的に考察する。とりわけ、キリスト教、そしてギリシャの哲学を全体として批判的に見直し、それが未来への糧になるという方向性がニーチェにおいて強く出ています。

このような形で、いま起こった技術的なカタストロフというか災害の根っこがある。つまり、私たちは過去から引き継いできた思惟の伝統、哲学の伝統の中の一コマとして、一場面として、ああいった原子力災害というものが、原子力災害として展開する必然性がそこにあった。必然性があるものを多少の改良を加えたところで、むしろそこに潜んでいる、今までの道から出てきている必然的な動きに対し、どう対処するか。他の展開の仕方はなかったのか。あるいは、どのような選択の可能性がないのか。そういった方向での技術、文化、哲学と自然といった根本的な枠組みの中で、もう一度しっかり東洋に伝わっている技術と自然との関わり、そして西洋に伝わっている自然と技術の関わりといった根本問題から考え直さなければならない。それが私の哲学者としての、この技術の問題に向けての答えです。

ニーチェに関しての内容ですが、哲学の歴史は概念をどう新たなものにつくり上げていくのかという、いわば各時代の各哲学者が自分なりの考えの中で今まで伝えられてきた概念を、精緻化したり、差異を述べたり、そして新たにつくり変えた結果、いわば概念との作業、具体的な格闘の歴史であったと思います。その中でニーチェは記念碑的な歴史と、古道具のような歴史、あるいは芸術の歴史といった見方をとらえていますが、その記念碑的な歴史の背後に敷かれている概念の再構築のような作業に、明確な反省の視線を届けなければいけない。

フッサールの場合に言えることは、フッサールは時代が少し遅れてきているわけですが、「学問の概念そのもの」に批判的な目を向けました。つまり、一方的な科学の進歩という見解に対し、哲学的な反省を向け、学問の進歩と言っているけれども、学問性そのものに大きな懐疑を投げかけ、後期の生活世界の概念の中に含まれるような批判を展開したわけです。ハイデッガーの場合も、技術の問題を技術とは何かという形で問題にしてみました。

私が言いたいのは哲学の中での、哲学内部でのそういった基本的な概念を踏まえて、精緻化している個別的な自然科学や社会科学の根底に潜む基本的な概念把握。その根底にこれを哲学は改めて真正面に、いったい全体、何をやっているのだということをテーマとして未来を開拓していかなければならない。仮に 20 世紀を経済の世紀だとするならば、21 世紀はエコロジー (Ökologie) の世紀と言わなければならないでしょう。しかし、このときにいったい全体、エコロジーということで、何を理解し、何をどのようにしていくつもりなのか。エコロジーという言葉自体、あるいは方向性そのものの根底的、概念的把握が必要であると思われます。

河本 日本にいて福島で起きた事件に遭遇して感じられることで、すべて哲学の課題になるかどうかは別ですが、いくつかの点があります。第一に真善美という基本的な領域、これにはアリストテレスもカントも立っていますが、真善美という大きなカテゴリー領域以外のカテゴリー。例えば健康であるとか、発達であるとか、別のカテゴリー領域をきっちり立てていく訓練もしていけないと、既存の議論の中に収まらない経験や課題を、うまく立ち上げることができないのではないかという思いもありました。

シュテンガー ご存じのように真善美は、カントまで強力な、普遍的な西洋哲学の根本構造として伝えられてきているものです。ここでこれがベースとして残ること自体は一応そうだとおき、しかし、いつもここから出発すべきと考えるのではなく、むしろ例えばニーチェが *Große Gesundheit*、“大きな健康”という言い方をしています。これは通常、人間的に考える病気と、健康ではないレベルの東洋哲学で言えば絶対無のようなレベル、*Große Tod* “大きな死”ですか、死ぬことをそういったレベルの問題であると思います。

ですから、これは結局、真善美そのものが健康と結びつけられる形で、“大きな健康”の地点から真善美を語るという方向性が出てきていいし、それはまた発展ということの入り口、発展という問題を通して真善美を語るような視点が出てきてもいいのではないかと私も思います。

河本 もう一つ日本で感じ取れているのは、これほどの大きな災害に直面したときに、これまでの人間の持っている経験の可能性の範囲ではどうも足りていないのではないか。すなわち、哲学が企てなければいけないのは、カント的な可能性の条件に代え、経験を広げていくための、あるいは経験の可能性を拡張していくための道筋を同時に探しておかないといけないだろう。それはフッサールがずっとやり続けてきた形が一つあります。それから、伝統的な倫理観を超克するような形で、ニーチェももちろん企てたわけです。

ただ、人間そのものをつくり変えるというよりは、経験の仕方をもっと拡張するような形で事態を受け取れないと、どうにもうまく受け取れない、そういうものがあるのだという印象を持ったわけです。

シュテンガー おっしゃるとおりだと思います。私が『間文化性の哲学』で書いたのはまさにそのことであり、カント的な意味での経験と超越論的条件性のような、今までの対置を超える、それでは語れない経験そのものの根本経験という概念を含みつつ、いわゆる経験論的なもの、超越論的なものといった対置を乗り越えているような、そういう新たに理解されるべき経験の概念というか、経験の領域が確定されなければならない。

フッサールは『危機』書の中で、まさにそのことを企てていたわけで、自然科学的な領域と、今まで考えられてきている超越論的哲学、カント的な意味での超越論性を乗り越えるものを打ち出しています。ニーチェの場合も同様に、概念といったものはニーチェにおいては、もう崩壊していきます。それに先行する形で経験が展開していきます。この経験そのものの展開のレベルが、正しく把握される必要があると思います。ですから、経験の新たな表現方法が求められます。把握の仕方が求められるのだと思います。一般的になりましたが、そんなことですね。

河本 もう一つ別の観点になりますが、英語でいうとテクニクとスキルの両者を分け、どううまく考えるかというところがあります。日本人の技術はテクニクを完成させていく方向。例えば

非常に美しい建物をつくったり、快適な車をつくったり、こちらのほうの対応は日本とドイツは並び称されるほど優れたものを持っている。

それに対しスキルは、例えば緊急時のような場合に最適の選択ができるという能力です。テクニックというのはサッカーにたとえると、美しいシュートが打てる。スキルというのは、とにかく相手のディフェンダーがいるときに、この場でも最適な選択ができる。スキルの能力がどうしても落ちがちになるということがあります。

例えば、バイエルン・ミュンヘンというチームにはミユラーがいますが、あのミユラーは技術的には大したことはないけれど、スキルが抜群。つまり、困ったときでも何とか最善の選択をするような、そういうすごさを持っているのではないかと感じています。

シュテンガー 非機能的機能とでもいうか、要するにミユラーはミユラー自身にとっても予測不可能な動きをする。だから、この予測不可能な動きなどを、サッカーのトレーナーは技術的な問題にすることはできない。しかし、ミユラーがミユラーであるゆえんは、まさにこの非機能的な機能という側面で、技術で解消できない能力だ。そして、それがミユラー自身にも自覚していない自発性だ（笑）。そういうものだと思います。

要するに、ミユラーは試合のときだけがミユラーではないのですね。インタビューのときもミユラーである（笑）。とりわけ、記者がいつもミユラーさんとインタビューしたいのはなぜかという、今までで聞いたこともないような反応がミユラーから出てくる。そういうインタビューになり、ものすごく面白い。そして、ミュンヘンのグループは絶対にミユラーを手放さないだろう。どんなやつが出てきても高く売ったりするけれど、ミユラーは絶対手放さない。

なぜかという、ミユラーの価値は今までの最高の技術、最高のレベル、最高のこうあるべきだというスタンダードがある。そこに対してカネを払ってきたけれど、それを突き破ってしまう、最高の技術の上をいく、それを突き抜ける。この突き抜けることに対し、ミュンヘンのサッカーチームの所有者はよくわかっている。突き抜けるのはトレーニングのたまものというようなものではない。出てくるものであり、それに対し最高の報酬を出して、ミユラーは絶対に手放さないだろう。今までも技術の天才と言われる模範の選手がたくさんいます。そういう模範の選手の模範像のようなものが、ミユラーを通して崩れてきた。新しい模範、それがミユラーだ。

しかし、一つ強調していかなければならないところがある。今は、サッカーはこれまで続けてきた教会と同じだ。権力の象徴になっている。要するにサッカーが王様というか権力のいちばんトップにある。どうしてそうなっていったのかは、基本的に福島事故と同じだ。なぜかという、経済と技術で成り立っていた。

しかし、今までの経済と技術の両足で立つという事柄は、もう立ち行かなくなる。これでは無理なのだ。福島に象徴化されるように、この 2 本柱でこれからの未来を上がっても、崩れ

去っていった教会と同じような運命になる。サッカーの一つの側面が教会であるとするならば、もう一つの側面はゲーム、Spiel だ。要するに、遊動というか、活動というか、遊びを含んだ遊動空間のようなもの。ゲームがサッカーの目的になっている。

サッカーチームは高い金を出し、技術的に優秀な人を持ってくるわけだけれど、サッカーの究極の目的はゲームなわけですから、ゲームの中に含まれている創造性や、ある種の偶然性といったものがサッカーをサッカーにしているわけだ。このサッカーをサッカーにしているところも、もちろん見失うわけにいかない。だから可能性としてというか、選択肢ということであれば、そのゲームという側面により重点を置くことになるのではないか。

ゲーム理論というものがある。ギリシャの今の財務省の大臣は、ゲーム理論とマルクス主義を混ぜたようなものをしている。しかし、ゲーム理論の背景にあるのは、いちばん最高の利益である。だから最高の利益を目指しているので、結局のところゲームがゲームであるということ。逆に言うと人生もゲームであるというような、ゲームの本質が見損なわれるというか、しっかり捉えられないという危険はいつも伴っている。

皆さん、ある程度ご存じのことだから短く言います。自然と技術の関係を西洋哲学の歴史の中で見ると、ギリシャ哲学においては、自然はまだ生きていた。簡単に言うと、キリスト教でもって自然と文化の区別が起きる。精神的な文化と物理的な自然との断絶。断絶が起こると同時に精神的な文化に自然が従属するよう、自然を支配する精神という構図がしっかり出来上がった。そして近世以後、学問という名前で、学問は実は精神的文化に従事するものにほかならない。自然科学でも同じこと。外的自然であれ、内的自然であれ、その中に潜む合理性、合理的な規則性を対象にして、精神がいわば感性と知性という大きな枠組みの中で感性を知性が文化化する、文化的に昇華する。そういう主立った構造的な枠組みを常に持っていた。文化とは技術である。ですから、西洋の文化は技術なのだ、自然を支配する技術だということです。まず、これは西洋的な考え方の基本です。

私の知る限り、東洋の場合には自然と人間。技術はいま括弧に入れておきますが、自然と人間の対応の仕方が、先ほど言った文化と自然、あるいは技術と自然という対応の仕方を取っていない。自然に対して生きるのではなく、自然とともに生きる中で、とりわけ人間という概念に含まれているような、人と人との間ということです。常に間の中で、自然と人との間、人と人との間、そして人と動物との間とか、人と何かの間という性格を持っているのではないか。

例えば日本に関連した、あるいは東洋に関連した荘子や道元といったテキストを見るとわかるように、自然とともに、自然の中で、自然の一員として、俳句は自然の歌といってもいいように、当然ですが、技術的な支配の対象物という考え方はまるっきりない中で、自然が昇華したもの、自然が結晶化したものとして芸術が考えられ、文学が考えられている。ですから、自

然と人間との対立軸は考えられていない。

技術の問題に入ります。まず、ギリシャのアリストテレスが主体になって考えられた技術ですが、それは芸術と芸術の仕方というか、芸術の手段、方法の側面に分岐していきます。芸術のほうはカントの言っている天才の方向に、芸術家という方向に分かれていく。そしてどのようにしてものをつくっていくかといった方向性が、学問、自然科学の方向に移っていきました。

それをいま自然と関連づけてみます。自然はいつも両方に関与しています。今まだ考えている途中にあるのですが、自分の考えを述べてみます。日本においては生の自然はなく、はじめからどこか分画された自然となっている。

例えば石庭ですが、これには実はテクネーから始まった全部の要素が一つにまとまっている。一つは水に象徴される変化、変転で、もう片方は永遠に象徴される石。変化と永遠というものが一緒になりつつ、それが空あるいは無として表現され、それがそうあることで、これは興味深いことにお寺の内部にある。寺の外ではなく、寺の最も重要な核心部に石庭が位置する。石庭にたどりつくためには、そこに行く道がある。石の道でも何の道でもいいのですが、これは何々道と言われる、武道、剣道や柔道と言われるときの道の概念に相当するもので、いわばその道を通して、空であり、無であり、まさにそうであるという、仏教の核心に至る道なのである。これが文化の構成と言えるのではないか。日本の文化の構成の仕方なのだと。

これから私の命題に入りたいと思います。要するに、福島は対立する形だけれど、これと同じような構造を持っている。

まず、水があり、そして原子炉の内部での原子核に代表される、原子炉で燃えている燃料があります。燃料はものすごい量のエネルギーであり、それが岩や石に比べられるのはどうしてなのか。石は日本において、普通は宝石や飾りという形で、さまざまに細工されてアクセサリーになったりするのですが、石が石として文化的なものというか、石として文化の中心になったのは 13 世紀頃と言われています。石はある種の無限のエネルギーを象徴するものであり、下に沈下していく、地下に向けての、まさに瞑想に値するような、下に向けての無限のエネルギーを象徴するような氷山の一角である。だから、石は自然であり、自然のエネルギーを象徴するものであり、そしてそれは瞑想にも比喩的に活用することができる。

そして、水は冷却水である。つまり無限のエネルギーを、冷却水を通して、人間が活用できるようにしていく。そして、その最も内部にあるものは、原子核から解放された、莫大な、目に見えないエネルギーです。

最も内側にあるものは、しかし同時に閉鎖されているという意味で寺と対比されます。お寺、**temple** のもともとの意味は閉鎖された、隔離された領域であるということであり、それはまさに原子力発電所の原子炉にほかならない。この大きな対比の中で比べる中で、私が言いたいことがこれから出てきます。

この二つの由来を持つ片方は東洋の伝統、もう一方は西洋の伝統に立つ、内的構造性が類似している石庭と原子力発電所に対し、どのように哲学が関わっていくか。その一つの提案、未来の方向性としてあるのが舞踏（暗黒舞踏）である。なぜかという、舞踏はこの両者の間に行くのだ。両方の要素を含み入れていて、全部漏れなくすべてを統合している。しかも、そのとき重要であるのは、舞踏は文化性に対する反逆であり、学問的に操作されてきたものへの革命であるということだ。最も端的に表せるのは原爆で殺された人々の肉体だ。これが出発点となって、技術の成果の犠牲になったそのような肉体が、このような全体のあり方、とりわけ文化に対して反逆性を提示し、革命を起こす。

しかも、どこから革命を起こすかという、自然から革命を起こすのだ。泥、水、自然の中から立ち上がった身体である。身体は自然に対する応答の仕方は、手のひらが地面に触れるように、一つには自然からの力を獲得すると同時に、触覚の持つ反省の性格も併せ持っている。そのような形で自然と文化、あるいは技術と自然の統合、総合という形で舞踏が成立している。そういう一つの方向性を提示できるのではないかと思います。

もちろん、舞踏が救い主というわけでもないし、舞踏で全部が解決できるわけではないが、舞踏が育ててきたのは核爆発が起こってきたと同時にですから、その命運を舞踏は背負っている。その意味で経験の拡張である。感性そのものに根付いたものであり、感性をどうこうするという話ではない。その中には政治的、経済的なものも含め、あるいは日常的なものも含め、すべてが舞踏文化というか芸術の中に、表現にもたらされている。

河本 少しだけ奇妙な日本の事実があります。それは、原爆が直接投下されたのは、世界的に基本的には日本だけ。それから、ある新興宗教教団があり、サリンというガスをまかれたのは日本だけ。かなりの人が亡くなりました。3番目に巨大な原発事故、恐らく世界で例のないような原発事故を起こしてしまった。ある意味で巨大な技術の負のほうの実験場所が日本である。

シュテンガー 理解できないのは、もちろん安全のためとはいえ、福島の海岸沿いにあんな見苦しい防波堤をつくっている。美しい海とつながった日本の自然に、あの長い防波堤が全部重なっている。

河本 一つは、復興という名目で経済効果を出すためには、建設業界、土建屋にまずお金を動かさないといけないというのがあり、最も簡単なのはああいう塀です。塀をつくっておけば、とりあえずは安心・安全と言われる、ああいう形の、要するに「見える姿」をつくることのできる、そういう形です。

シュテンガー あまりにも短期的な見方ではないか。これでもって短期的な目的は達成されるかもしれないが。日本は今まで震災もあったし、津波の災害もあった。しかし、津波と地震に対立するような形でのああいう防波堤を、いわば反抗者として自然に向き合った歴史はないはずだ。

自然とどうにか工夫しながら、共に生きるようにしていたはずなのに、真っ向から津波を敵に回した。そして、自然の景観、それから今まで生きてきた自然との共生をぶち壊しにするのは、あまりにも短期的な見方ではないでしょうか。

河本 全くそのとおりです（笑）。いくつか質問をしたいことがあります。一つは、シュテンガー先生が話された自然。その自然を持ちながら、さまざまな科学が日本に入ってきた。例えば、キリスト教文化と一緒にあったような形の科学が、日本に入ってくると分離され、科学は科学できっちりと受け入れができる。その形をとったのは、アジアでは日本だけですから。日本が一度やってみせると、日本から逆に輸入の形で中国に伝わったり、韓国に伝わったり。これが何か日本の文化の特質のようなもの、ある種の弾力というのか、ヌエ的でもいいのですが、要するに入ってくるときの受け入れの仕方が、類のないような文化形態をつくっている感じは受け取ります。それらについては、シュテンガーさんはどう考えられるのか。

シュテンガー 中国と韓国の場合の西洋文化と技術の受け入れられ方は日本と違う。日本の場合はそういうある種の成功を収めているのですが、文化的な側面も同時に受け入れ、そして社会的な変革が起こっている。例えば、中国の場合の共産主義、韓国の場合のアメリカニズム、アメリカ文化にいわば吸い取られた形があるのではないかと。

日本の場合に、技術が技術として学べられるという特性があることは確かにそのとおりだと思いますが、先ほど申し上げましたように、西洋文化の場合は、キリスト教的な伝統や西洋哲学の伝統と技術が、言ってみれば土壌の上に技術が乗っている構造です。日本の場合はキリスト教的な、あるいは西洋哲学的な土壌に代わるものがあり、それが神道、仏教や儒教のような生活に結びついた考え方のようなものが技術と並び立っている。

お互いに無関係のように見え、一つの併存している形を見た場合に、例えばハイデッガーの言っているような表象化するという考え方でない、技術についての批判的な考え方としての放下（Gelassenheit）という形のあり方が、ハイデッガーの場合は特殊な一つの西洋哲学の亜種のような形ですが、そのような放下のようなものが、東洋的な伝統の中にはもっと生き生きとした形で、さまざまな日常生活、生活習慣や日本の生活世界の中にまだ生き生きと働き続けていて、その土壌と高度に発達した技術の重ね合わせのような特殊な状況があるのではないかと思います。

河本 例えば哲学ということで言えば、すぐに役に立ちそうな哲学書を読んだりということはいくつもの国でやるのですが、例えば新カント派から哲学の体系、カントの体系とかを学び、哲学書を学び、ヨーロッパの哲学を総体として受け入れ、何か違う形まで展開していく。というようなところまで一応はやろうとする。この形になるのは、たぶんアジアでは日本ぐらいしかなく、韓国にはカント全集はないし、中国は役に立つものしか読まない。

ある種の精神の持っている弾力と、日本の総合的な経済政策との間には相当隔たりがあり、

それでも何かやれてしまっているという不思議。要するに文化のミューラーのようなもので(笑)、文化のミューラーのようなことを、どこかでやらかし続けている面があるのではないか。

シュテンガー そのときにどうやって受容するかということです。もちろん、受容の努力はすごくて、ありのままを受け止めようとするわけです。しかし、そのときに、日本人なりの消化の仕方がある。その消化の仕方は、先ほど経験の拡張とおっしゃったようなあり方の、自分の生きてきた経験の素地に合わせて加工するような、特有な消化の仕方があるのではないか。結局、インフォメーションとして、ただある知識として、それをあるがままに受け止めるのだったら、たいてい知識の山に誰だつて押しつぶされてしまう。だから、それをどのように自分の中で消化するかという、その消化の仕方が先ほど言っていた経験のようなものとつながっているのではないかということです。

ガーベルベルガー 福島の事故が起こった後に、いろいろな国のリアクションがありました。一つのリアクションとして言えるのは非分脈化ということで、構造的な問題を明らかにするような試みでした。それはどういうことかという、あれはロシアで起こったように東洋の世界の出来事であり、特別なことであり、地震の多い、そして津波も生じるような日本の、アジアの、極東の、特別な問題であり、という具合にして分脈化した中で眺める傾向だと思います。

それに対しドイツが行ったのは、非分脈的な見方でもって内部構造的な問題として扱い、その中で政治的な決断に入ったわけです。それを日本で対比させてみると、やはり日本の場合には分脈の中に入ったままですが、地震が多くて津波も予想されるような分脈の中で、どうにかアトムエネルギーというか原子力エネルギーの活用を、さらにその分脈の中でどうにかしていこうという方向性に今も動いているし、その中で工夫をしているように見受けます。

この3~4年の動きを見ると、日本は福島の領域の復興に関してある一定の成果を上げているように見えます。なぜかという、汚染されたところの汚染の除去をしながら、人が戻ってきて住めるような環境づくりのところまでいこうとしているし、次第にその実現可能性が開かれてきている。これは西洋の場合なら考えられません。なぜかという、その地域を誰も人が住めないような領域として完全に隔離してしまう。隔離政策ですから、その点は日本の独自性のように思います。

その際にシュテンガー先生がおっしゃっている、自然と経験ということに関連しての質問です。お聞きしている中で、自然と文化と技術という全体の問題の関連の中で、自然の概念がある種、楽観的というか、あまりに自然に頼ってしまっているというか、自然の力、エネルギーを過小評価しているように見えますが、どうでしょうか。それは経験の概念にも関わってきますが、その関連について。つまり、経験と、それから過小評価された自然は問題含みではないかということです。

シュテンガー ドイツと日本を比較して、構造的と分派的という分け方を提示されたのは面白いと思います。そして、構造的ということの中身を見たときに、エネルギー政策はどここの国でも重要な問題なわけで、そのときに原子から自然エネルギーに移行しようという決断がなされたわけです。これもいろいろなことがあり、いま電気が足りないので石炭を使おうかというばかな話も出てきています。

石油は中間に位置するようなものですが、この石油をめぐる世界経済、それからロシアとアメリカと中東の問題は、政治絡みの経済的な問題が山積しています。今ある石油を中心にしたエネルギー供給の、世界経済の全体のネットワークの輪を見ながら、これからエネルギー政策をどう展開していくかということが必要になってくる。もともと 19 世紀、20 世紀のころには、戦争を通してエネルギーを獲得するのが当たり前でした。

しかし、それが冷戦の時期に至って、お互いに殺し合うような原爆を使っても両立しないわけですから、原爆による均等性というか、利益の割り振りのような形で、今のところずっと収まっているわけです。そして、お互いに戦争はせずに、冷戦構造がいまだ基本的には変わらないまま続いているわけです。これがまず 1 点として、構造的な分析の内容の一つとして、そういった世界規模のエネルギー政策の問題視点を、まず確実に捉えておく必要があると思います。

自然をあまりに重視しているのではないかというご批判の趣旨はよくわかりますが、いま私が自然と言っていることは、例えば生け花の表現の仕方に連想されるように、形態のない形態、自己のない自己といった形、あと自然と文化あるいは自然と芸術、宗教といった対立軸の中にあるような自然ではなく、大きな自然、それを包括しているような自然です。

少し端折りますが、それが自然に起こるとか、おのずからというときの表現に含まれているものであり、それが二元対立の背後に生きているし、それが表現にもたらされていると言えるのではないかと。ですから、技術と宗教と文化といった三つともが対立軸の中にあるわけではなく、それが総合されていながら、そして総合のうちに自然にと。自然ということの中で表現され得るような意味での自然が、まだ可能であり、これはこれからの哲学において放棄すべきでない見方であると思われます。

今まではたいてい学問、技術の西洋、そして芸術、宗教の東洋といった大きな分け方で見られる場合が多々ありましたが、対立軸を超えたところに大きな意味での自然があるのではないかと思います。

ガーベルバウアー ある種の「自然」に帰るといふか、技術化された自然ではなく、ドイツの中にはいろいろな現象が見られます。例えば、田舎に帰って田舎暮らしをすとか、エコを意識した形で自作、自分で作り、自分で消化するといったいろいろな方向での、自然との共創というか、共に生きるというあり方の試みがドイツにおいても、ヨーロッパにおいてなされています。

しかし、一つの危険としていつもあるのは、それが経済効果の一環として、あるいは経済政

策の一環として試みられ、つまりエコ商品が出回り、全部市場の問題に解消されていってしまう、市場主義のエコの商品になってしまう。そうすると、本当の意味での生き生きとしたエコロジー、サステナビリティや持続可能性といった標語の下で、産業はいくらでもつくり上げられるわけです。それに対抗し得るような、本当に自然の経験のような方向に行く具体的な可能性や方向性は、どういうところに見られるのでしょうかという質問です。

シュテンガー まず1点は、自然をめぐる間文化的思惟を展開すること。つまり、その際にお互いに同等の目線でもって、相互に自然についてどう考え、どう理解しているのか。それを相互に哲学のレベルで結構なので、お互いに理解し合うということです。それを日本がなさったように全部を受け止めるというのではなく、お互いがお互いを批判しつつ、自然についてどう考えるかを練り合わせていくことが一つの方向性。

もう一つの方向性はエコロジーという概念そのもの。つまりエコロジーを根本概念としてどう捉えるかということが重要になってきます。例えば、荒川修作さんの例が出ましたように、そこでは住まい、住むことを経験するといった、そういう形でエコロジーの新たな捉え方をする。それが空間性、時間性すべてを含め、住むということの経験はどのような質的な普遍性と差異を内に含むのか。こういった状況の中では、もはや国の区別は意味をあまりなさなくなってきました。

そういったさまざまな試みがいろいろな国の中で行われてくるわけですから、その中ですみ分けるとか、技術の活用やエネルギーの活用などを含め、新たに住まうというロゴスの明確な構築。これは新たな構築なので、そういった形で展開する可能性が開かれているのではないかと。それは今までドイツで見られたような自然に帰れとか、ロマン主義で技術に対する反抗、反逆の手が挙がりましたが、ドイツの場合はたいていどちらか、文化、技術、学問を強調すれば、その一方として無秩序ではないけれど、自然とともにある非常にラジカルな形で、自然と一体化するといった真逆のブレがありました。あっち行ったり、こっち行ったりするのですが、それはこぶしを振り上げてという表現がいちばんいいかもしれません。

ドイツの人たちは対立する形での思想的なトレーニングといますか、闘争ですか。そういった形での展開がなされてきたのですが、もはやそういう形ではなくして、お互いに了解し合いつつ、差異を認めつつ、エコロジーという経験の拡張の方向に、お互いに確かめつつ進んでいくような方向性が見られるのではないかとということです。

河本 論じなければならないことはまだまだ切りがないと思いますが、一応このところで区切りにして、次の機会にまたやることにしましょう。何回かやっていくと相当詰まってきた、どこが焦点で、どうやって相互に超えていくかが見えてくると思います。

シュテンガー 次はウィーンですね。

河本 次はウィーンで。ですから、きょうはここのところで一区切りにして、また次の機会に日本かウィーンか、どちらかでやりたいと思います。

シュテンガー ありがとうございました。